

分科会 21

リカバリーをさまたげない薬とのつきあい方

司会：谷口研一朗（より添いとたい話の診療所院長）
発表者：下平美智代（特定非営利活動法人リカバリーサポートセンターACTIPS）
糸川昌成（公益財団法人東京都医学総合研究所）
築地茉莉子（千葉大学医学部附属病院 薬剤部）
加藤伸輔（ピアサポートグループ在）

【分科会の趣旨】

日本では、多剤大量処方が一般的に行われてきた歴史があります。この「薬への過剰な期待」は、いまだに根強いものがあります。そうした影響もあり、医師のみならず、他の医療従事者たち、地域の支援者たち、家族、当事者たちにとっても、「病気の症状を改善するにはまずは薬」という発想となり、薬に対する過剰な期待となりがちです。ところが、近年、第二世代抗精神病薬（SGA）は代謝系の副作用が大きいこと、そのために突然死のリスクが高まることなどが認識されるようになってきました。そうした背景もあり、薬に過剰に期待をするのではなく、体の健康も留意した薬とのつきあい方をするべき時代となってきました。

この分科会では、過剰な服薬はリカバリーを妨げること、そして、薬だけに頼らない生活の大切さを考える場となりました。

【発表内容】

発表1：オープンダイアログが意味すること—そして現場に活かす 下平美智代（看護師）

オープンダイアログは、発症の初期の段階では、薬よりも対話を重視する関わり方であり、そのアプローチは、8割の人が改善するという結果を出しています。

発表1では、オープンダイアログが意味すること、および、訪問型のアプローチを実践するなかで、その考え方をどのように活かしているのか、ということを発表してもらいました。

発表2：脳と心をつなぐアプローチ—糸川昌成（医師）

人間を細かくパーツに分解して研究をする歴史は、壊れた部品を正確に見つけ出し、薬で修理をするという発想につながっていました。この発想により、患者は薬をしっかりとらんで、再発を防ぐということが必要であるとされていました。

発表2の糸川先生には、人間を部品で見るのではなく、その人の全体を見ることの大切さを伝えてもらうとともに、体に作用する薬の意味することを語ってもらいました。

発表3：薬剤師の立場から見た薬にできること、できないこと—築地茉莉子（薬剤師）

薬剤師の立場から、「薬にできること、できないこと」「薬が最高の効果を発揮するには、どのような使われ方が望ましいのか」「リカバリーを妨げる薬の使われ方とは」といった内容を整理してもらいました。

発表4：WRAPに学ぶリカバリーアクション—加藤伸輔（当事者）

WRAPの創始者であるコーブランドさんは、かつて医師から「元気になるための方法はない」と告げられました。このことをきっかけに、元気になった人たちは何をしているのかを調査するなかでWRAPを考案したことはあまりにも有名です。自分自身のなかにある元気回復の力を信じて、それを実践することは、薬だけに頼らない生活に大きな示唆を与えてくれます。

この発表4では、WRAPを日常生活に取り入れている人に、「過剰な薬はなぜリカバリーを妨げるのか」「自分自身が持つ元気になる力とは何か」という話をしてもらいました。